

『税に助けられた僕の手とおばあちゃんの命』

町田市立南大谷中学校 3学年 平野 龍太郎

税について考えたとき思い出す2つのエピソードがある。

1つ目は2ヶ月前のある夜。僕は家で学校の美術の課題をしていた。彫刻刀で木箱を彫っていたとき彫刻刀が手に刺さった。手から血が止まらなかつたので市民病院の夜間救急に行った。市民病院には、夜間だったのにもかかわらず、たくさんの職員さんがいた。そして、すぐ僕の手を診てくれた。僕の手の傷は意外と深かつたみたいで、手を縫合することになった。縫合が終わって、精算をするとき、僕は驚いた。なぜなら医療費が二万二千元だったからだ。しかし、負担額は二百円だった。なぜ二百円なのかを調べてみると、医療証のおかげだったことが分かった。しかも、医療費の二万二千元は健康保険によって3割になった金額だと知ってもっと驚いた。もっと調べてみると、市民病院を建てるお金にも税金は使われているし、市民病院で働いている人のお給料も税金から出されていると知り税金の使われ方に感謝した。

2つ目のエピソードは1年前。家族で夜ご飯を食べた後、僕のおばあちゃんがアナフィラキシーショックを起こした。急いで救急車を呼んで、搬送してもらった。早く搬送してもらったおかげで症状は治まった。僕はこの出来事が起きる前、ニユースで最近、軽症な

のに救急車を呼ぶ人が増えていると聞いた。しかも、救急車の一回の出動に四万五千円もかかると言っていた。僕はこのニユースを聞いたとき、正直、救急車を有料化してもいいと思った。しかし、その後見たニユースで熱中症やコロナの症状で倒れても救急車を呼べないと言っているアメリカ在住の男性がいた。なぜなら、アメリカでは救急車の料金は日本円にしたら三万七千円から二十一万円とても高く、更に医療費も保障されないと知った。命の危険がある重症患者が経済的な面で救急車を呼びたくても呼べない人がいることに僕は驚いた。他の国も調べてみたが、救急車の要請が無償な国はイタリアやイギリス、スウェーデンなどがあるが、色々な条件があるようで、日本のように全部が無償の国は無いと知った。僕はもっとこの事をみんなに知ってほしいと思った。

僕たちは毎日授業を受けられている。そして蛇口からはきれいな水がでてくる。そして救急車のように誰かを助けるためにも税金は使われている。税金は自分たちの生活に必要な不可欠だ。そして、自分たちの生活を豊かにしてくれる。

僕は大人になるまで税金のことは何も考えなくて良いと思っていたが、この作文によって税金の大切さに気づくことができた。僕はさつき救急車を有料化しても良いと言ったが、無償で人の命が助けられるのなら、無償のままでもいいと思った。そして、自分も将来税金がどこで何に使われているのかを意識しながら、税金を払いたいと思った。